

授業改善の継続に資する校内研修 －「学びの振り返り」に焦点をあてて－

学籍番号 209102

氏名 池上智希

主指導教員 木原俊行

1. M小学校の校内研修の実態把握

所属校では平成29年度から、国語科を研究教科とし「読むこと」に重点を置いて授業改善に取り組んできている。しかし、授業改善に対する意識は、研究授業や指導主事が参観する際の授業に留まっており、継続して日々の授業を改善しようという意識には至っていないと感じた。その要因を把握するためアンケート調査やインタビュー調査を実施したところ、その結果から校内研修で学んだことを日常の教材研究や指導に必ずしも意識的に取り入れることができていないことが分かった。特に平成31年度の研究の視点の一つである「学びの振り返り」については、実践を行うことについて難しさを感じていることが分かった。そこで、本研究では校内全体で「学びの振り返り」の理解を深め、授業実践に繋げるために校内研修を充実させることを目指した。

2. 研究協議会の改善

研究協議会での話し合いを日々の授業改善に繋げるため、研究協議会のデザインの見直しを図った。協議内容を「学びの振り返り」に焦点化し、話し合いを活性化させるための手立てとして「授業参観シート」「少人数での話し合い」「学びの振り返りへ着目する時間の設定」の3つの取り組みを計画した。それらを用いて令和2年度は3回の協議会を実施した。2020年11月26日には研究推進委員会で研究協議会に対する省察を行った。話し合いからは「授業参観シート」を用いたことや、「少人数での話し合い」を行ったことで、話し合いが活性化したという成果があったことが確認された。これは2020年11月13日に実施した教員に対するアンケート調査からも同様の結果が得られた。また「学びの振り返りへ着目する時間」を設定したことについては、その取り組みは良かったものの、「学びの振り返り」について教員の理解が深まったとは言い難いという意見が多く出た。本校として「学びの振り返り」において児童に何を書かせるのか具体化しなければならないということが分かった。

3. 実践交流会の開催

児童が「学びの振り返り」においてどのような事を書けばよいかを示した観点を作成するために、2021年2月4日に研究推進委員会のメンバーと実践交流会を行った。2021年1月に取り組んだ実践について交流することを通して成果と課題を整理し、そのことをもとに本校の「5つの観

点」を作成した。令和3年度はその「5つの観点」を用いて実践を取り組むと共に、全3回の実践交流会を年間計画に位置付けることを管理職等との話し合いで決定した。

第1回実践交流会では、「5つの観点」を各学年の教員たちがどのように運用したのかを交流した。実践交流会の後半には、各学年団で「2学期に取り組みたいこと」と「学校として組織的に取り組むこと」について考えた。これらの意見を整理したものをもとに、後日研究推進委員会のメンバーと「各学年が重視したい観点を考える」という2学期の重点目標を決めた。第2回実践交流会では、前半は第1回と同様に実践を交流し、後半には各学年団が重視したい観点について交流した。そのことを踏まえて、3学期に取り組む実践について考えた。事後のアンケート調査から、どちらの実践交流会でも「学びの振り返り」の理解を深めることが出来たことや、日々の授業実践に繋がると感じるものであったことが分かった。一方第2回実践交流会については、時間の短さが課題として挙げられた。

4. 校内研修の工夫に関する評価

授業改善の継続性を高めるために筆者が2年間取り組んできた校内研修の工夫に対する総括的な評価を行うために、アンケート調査とインタビュー調査を実施した。アンケート調査から、研究協議会の改善を行ったことや実践交流会を開催したことは、本校の教員の実践をより充実させるための場として有効であったことが明らかになった。また「学びの振り返り」を継続的に授業実践に活かすことができていることが分かった。これはインタビュー調査からも明らかになったことである。また、学校長からも「教員が主体的に校内研修に関わることで『学びの振り返り』についての必要性が認識され、継続した授業改善に繋がっていること。」が成果として挙げられた。これらのことから、2年間取り組んだ校内研修は授業改善の継続に資する役割を果たせたということが判明した。

5. M小学校の校内研修の更なる発展

校内研修の更なる発展のためには「5つの観点」を再整理することが必要であると考え。再整理する内容として、①観点の内容の見直し（文言等の明確化）、②観点の運用の仕方、の2つが挙げられる。令和4年度は見直しを図った観点をを用いて実践を行うことで、校内全体で更に「学びの振り返り」の理解を深め、継続した授業改善に繋がっていくことができるようにしたい。

また、研究協議会や実践交流会の取り組みは継続して行う。特に実践交流会については、一定の成果が見られたため、次年度も引き続き校内研修の年間計画に位置付ける。しかし、第2回実践交流会の時のように、十分な時間を確保できないとその効果は薄れてしまう。そこで実施回数を2回に減らし、1回の実施に十分な時間を確保できるようにしたいと考える。実践交流会のテーマについては、令和3年度から更に発展した内容になるよう今後検討していきたい。また新転任者を対象とした実践交流会も計画し、令和3年度までの所属校の取り組みを共通理解する場を設定したい。